仙台市文化財調査報告書第 446 集

荒井南遺跡他

発掘調査報告書

荒井南遺跡第 3 次、今泉遺跡第 12 次、郡山遺跡第 258 次

2016 年 3 月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には現在約780箇所の遺跡が確認されております。

平成23年3月11日の東日本大震災より5年が経ちますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届の件数や発掘調査の件数は、平成23年度以降、震災前を上回る状況が続いております。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護に日々務めているところです。

本報告書には、個人住宅建築に伴って平成27年度に発掘調査を実施した、荒井南遺跡第3次調査、今泉遺跡第12次調査、大野田古墳群第23次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を伝えるために将来へ守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの大切な役割であると思います。地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より深く感謝申し上げます。

平成28年3月

仙台市教育委員会
教育長　大越裕光

例　　言

1．本書は、平成 27 年度に仙台市が実施した各種の事業および民間の開発事業に伴う発掘調査報告書であり、荒井南遺跡第 3 次、今泉遺跡第 12 次、郡山遺跡第 258 次の各発掘調査報告を合本にしたものである。
　本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。
2．本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は鈴木隆が行った。
　第 1 章－小泉博明　　第 2 章－鈴木隆　　第 3 章－及川謙作　　第 4 章－鈴木隆
　遺物の基礎整理～実測図作成　―　佐藤洋、向田整理室作業員
　遺物図・遺構図デジタルトレース－向田整理室作業員
　遺物観察表作成－佐藤洋　　遺構註記表作成　―　各担当職員
　遺物写真撮影・図版作製－小林航、鈴木隆　　遺構写真図版作製　―　鈴木隆
3．本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．文中および図中の方位は概ね北を示している。
2．図中の標高を測定した基準点のデータは平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災以前に測定したものをそのまま使用している。
3．遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査毎に付した。
　SB：掘立柱建物跡　　SD：溝跡　　SE：井戸跡　　SI：竪穴住居跡　　SK：土坑　　SX：性格不明遺構
　P：ピット
4．遺物の略称は以下のとおりである。
　A：縄文土器　　B：弥生土器　　C：土師器（非ロクロ調整）　　D：土師器（ロクロ調整）・赤焼土器
　E：須恵器　　F：丸瓦　　G：平瓦　　H：その他の瓦　　I：陶器　　J：磁器　　K：石器・石製品
　L：木製品　　N：金属製品　　P：土製品
5．土色については、『新版標準土色帳』（小山・竹原 1999）を使用した。
6．土師器実測図中の網点は黒色処理を示している。その他の特徴については、各図中に凡例を示した。
7．遺物観察表の（　）がついた数値は図上復元した推定値である。
8．本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田 1980）はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田ａ火山灰（To－a）」と考えられている。降下年代は西暦 915 年と推定されている。
　庄子貞雄・山田一郎 1980「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡 － 昭和 54 年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所
　仙台市教育委員会 2000『沼向遺跡　第 1 ～ 3 次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第 241 集
　小口雅史 2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題―十和田ａと白頭山（長白頭）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目　　次

第１章　荒井南遺跡の調査……1
　第１節　遺跡の概要……1
　第２節　第３次調査……1
　　1. 調査要項　　3. 基本層序　　5. まとめ
　　2. 調査に至る経緯と調査方法　　4. 発見遺構と出土遺物
第２章　今泉遺跡の調査……14
　第１節　遺跡の概要……14
　第２節　第12次調査……14
　　1. 調査要項　　3. 基本層序　　5. まとめ
　　2. 調査に至る経緯と調査方法　　4. 発見遺構と出土遺物
第３章　郡山遺跡の調査……21
　第１節　遺跡の概要……21
　第２節　第258次調査……21
　　1. 調査要項　　3. 基本層序　　5. まとめ
　　2. 調査に至る経緯と調査方法　　4. 発見遺構と出土遺物

第４章　総括……39

挿図目次

第 1 図　荒井南遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1
第 2 図　第 3 次調査区位置図 …… 2
第 3 図　第 3 次調査区設定図 …… 2
第 4 図　第 3 次調査 2 層上面検出水田跡 平面図・断面図 …… 4
第 5 図　第 3 次調査 3 層水田跡平面図 …… 5
第 6 図　第 3 次調査 3 層水田跡断面図 …… 6
第 7 図　第 3 次調査出土遺物 …… 6
第 8 図　第 3 次調査 3b 層上面検出遺構平面図 …… 7
第 9 図　第 3 次調査断面図（1） …… 8
第 10 図 第 3 次調査断面図（2） …… 9
第 11 図 第 3 次調査断面図（3） …… 10
第 12 図 今泉遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 15
第 13 図 既調査区の位置と今回の調査区 …… 16
第 14 図 第 12 次調査区設定図 …… 17
第 15 図 第 12 次調査区平面図・断面図 …… 18
第 16 図 郡山遺跡と周辺の遺跡 …… 21
第 17 図 郡山遺跡調査地点位置図 …… 22
第 18 図 郡山遺跡第 258 次調査区位置図 …… 23
第 19 図 郡山遺跡第 258 次調査区配置図 …… 21
第 20 図 郡山遺跡第 258 次調査区遺構配置図 …… 24
第 21 図 調査区東・南・西・北壁断面図 …… 25
第 22 図 SK2354 土坑土層断面図 …… 26
第 23 図 SK2354・2355 配置図 …… 26
第 24 図 SK2355 土坑土層断面図 …… 26
第 25 図 SI2356 配置図 …… 26
第 26 図 SI2356 竪穴住居跡土層断面図 …… 26
第 27 図 SI2356 竪穴住居跡出土遺物（1） …… 27
第 28 図 SI2356 竪穴住居跡出土遺物（2） …… 28
第 29 図 SA2357 配置図 …… 29
第 30 図 SA2357 材木列土層断面図 …… 29
第 31 図 SA2357 材木列出土遺物 …… 30
第 32 図 SI2358 配置図 …… 30
第 33 図 SI2358 竪穴住居跡土層断面図 …… 30
第 34 図 SI2358 竪穴住居跡出土遺物（1） …… 30
第 35 図 SI2358 竪穴住居跡出土遺物（2） …… 31
第 36 図 SI2359 配置図 …… 31
第 37 図 SI2359 竪穴住居跡・P1・遺構外出土遺物 …… 32
第 38 図 郡山遺跡第 258 次調査区周辺の遺構 …… 34

写真図版目次

写真図版１　第３次調査（1）…… 11
写真図版２　第３次調査（2）…… 12
写真図版３　第３次調査（3）…… 13
写真図版４　第３次調査出土遺物…… 13
写真図版５　第 12 次調査（1）…… 19
写真図版６　第 12 次調査（2）…… 20
写真図版７　第 258 次調査区（1）…… 35
写真図版８　第 258 次調査区（2）…… 36
写真図版９　第 258 次調査出土遺物（1）…… 37
写真図版 10　第 258 次調査区出土遺物（2）…… 38

第１章　荒井南遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

荒井南遺跡は仙台市東部の若林区荒井字荘ノ頭・遠藤西に所在する生産遺跡である。遺跡はＪＲ仙台駅から南東約 5.0㎞に位置し、標高 3.0 ～ 4.7 ｍの自然堤防から後背湿地にかけて立地する。本遺跡は、平成 24 年の土地区画整理事業に伴う試掘調査の結果、弥生時代中期の水田跡が確認されたことから、平成 25 年２月に新規登録された遺跡である。以降、２次の調査が実施され、該期の水田跡が良好な残存状況で検出されている。これらの調査で確認された水田跡は、日本海溝付近で発生した地震を原因とする津波によってもたらされた砂を主体とする堆積物に覆われており、近年、発掘調査が行われた香形遺跡及び荒井広瀬遺跡の調査成果と併せて、仙台平野における過去の災害痕跡を発掘調査により確認した事例のひとつとして注目される。

第２節　第３次調査

1. 調査要項

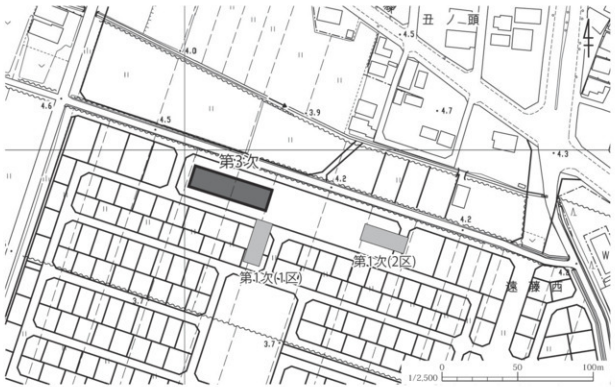
遺　跡　名	荒井南遺跡 （宮城県遺跡登録番号 01571）
調 査 地 点	仙台市若林区荒井字遠藤西 121 番地外
調 査 期 間	平成 27 年２月 16 日～ 平成 27 年３月 27 日
調査対象面積	858.29㎡
調 査 面 積	286.2㎡
調 査 原 因	復興公営住宅の新築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係
担 当 職 員	主事　小泉 博明 文化財教論　小山紘明

番号	遺跡名	種　別	立　地	時　代
1	荒井南遺跡	水田跡	後背湿地	弥生
2	押口遺跡	河川跡・水田跡・包含地	自然堤防・後背湿地	弥生～近世
3	高屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
4	中在家南遺跡	土器棺墓・土壙墓・方形周溝墓・河川跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～近世
5	仙台東部条里跡	条里跡	自然堤防	古代
6	中在家遺跡	包含地	自然堤防	平安
7	荒井堀中道跡	散布地	自然堤防	古墳～中世
8	荒井館跡	城館跡	自然堤防	中世
9	香形遺跡	生産遺跡	自然堤防	弥生～中世
10	長喜城跡	城館跡	自然堤防	中世
11	荒井広瀬遺跡	河川跡	後背湿地	弥生～古墳
12	下荒井遺跡	散布地	自然堤防	平安

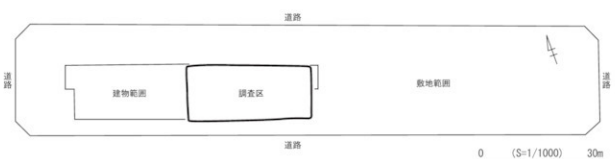
第１図　荒井南遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成 27 年１月５日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（平成 27 年１月 19 日付 H26 教生文第 107 － 56 号で伝達）に基づき実施した。対象地は荒井南遺跡の北部に位置し、第１次調査で水田跡が比較的良好に残存していた１区及び２区に近接する。調査区は、第１次調査成果に基づき、津波堆積物が良好に残存していると考えられる復興公営住宅建築範囲東半部に設定した。調査は、平成 27 年２月 16 日に着手した。区画整理事業に伴う盛土及びその直下に分布する植物遺存体主体層上部を重機で掘削し、土層観察と排水を兼ねた調査区壁際を全周する側溝の掘削を人力で行った。調査区壁断面の土層観察から本調査区の基本層の大別をこれまでの調査成果に基づいて行い、植物遺存体主体層を基本層１層、津波堆積物を２層、水田耕作土を３層…と層番号を付した。調査区壁面の観察から、調査区のほぼ全域で砂を主体とする津波堆積物である基本層３層の分布が認められ、それが途切れる基本層３層の高まりが４か所で確認された。規模や断面形状、周辺の堆積層の状況から、大畦畔の存在が想定された。その後、植物遺存体主体層中位から堆積層の掘削と遺構精査は人力で行っ



第２図 第３次調査区位置図



第３図 第３次調査区設定図

た。その結果、基本層２層中で前述の高まりが畦状に連続して延びることが平面で確認され、大畦畔に区画されたふたつの水田区画の存在が確実となった。一方、津波堆積物である基本層２層は断続的ではあるが、ほぼ調査区全域に分布することが認められ、その上面で畦畔の痕跡である擬似畦畔Ｂ４条を検出した。この畦畔の痕跡は、基本層２層である津波堆積物を数cm幅の植物遺存体層が挟むように延び、これらが平行に配置され、「Ｔ」字状に接続する箇所も認められた。このことから、津波堆積物上に堆積した植物遺存体主体層を母材とする水田跡が存在する可能性が推測された。その後の津波堆積物掘削の過程で東西方向及び南北方向の小畦畔２条を確認した。いずれの小畦畔も基本層 3a 層を盛り上げて形成され、大畦畔と接続する。基本層 3a 層は層下面に著しい凹凸がみられるなどの特徴や層位的関係から弥生時代中期の水田耕作土と推測され、基本層２層中で確認した畦畔はこの水田跡に伴うものと判断した。以上のように本調査では、津波堆積物層と植物遺存体主体層を挟んで２面の水田跡を想定して調査を行い、適宜、平面図および断面図、調査区配置図を作製して、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。調査区の埋め戻しは、平成 27 年３月 23 日から重機掘削残土及び遺構精査時発生土を用いて行い、調査器材搬出を

併せて、今回の調査は平成 27 年３月 27 日に終了した。

3. 基本層序

今回の調査で確認した基本層は大別４層、細別８層である。本来であれば、第１次・第２次調査成果に対比させて、今回の調査で確認した基本層を把握すべきではあるが、これらの調査報告では、調査時に確認した層の細別が断面図上で反映されていない箇所があることや土層註記に今回の調査時所見と異なる点があることなどから、新たに層番号を付して基本層の細分を行った。したがって、ここで示した基本層序は第１．２次調査のものとは対応していない。また、区画整理事業地内では、現水田耕作土の鋤取りが行われており、第１次調査で設定された基本層１～２層は残存しない。

１層：第１次調査の３層に対応する。未分解の植物遺存体を主体とするもしくはこれを多く含む自然堆積層で、４層に細別される。a 層は調査区南部に分布する班鉄を多く含む黒褐色を呈する泥炭質粘土である。第１次調査の基本層３a 層に対応するものと考えられる。b 層は黒褐色を呈する泥炭質粘土である。c 層は黒褐色を呈する泥炭質粘土で、植物遺存体を互層状に含む。d 層は黒褐色を呈する泥炭質粘土で、植物遺存体を多く含む。b ～ d 層は第１次調査における基本層 3b 層に対応するものと考えられる。なお、本層には、２層上面で検出した畦畔の痕跡に伴う耕作土が含まれている可能性がある。

２層：第１次調査の基本層 5b 層に対応する津波堆積物である。部分的に断続的な箇所が認められるが、ほぼ調査区全域に分布する。主に明黄褐色を呈する粒径の揃った砂で、下層の３層を斑状に含む。調査区東部ほど層厚が増す傾向にある。

３層：第１次調査における６層に対応し、２層に細別される。上層の a 層が弥生時代中期の水田耕作土である。a 層は黒褐色を呈する粘土で、層下面に起伏が認められる。植物遺存体を含み、下層の b 層を斑状に含む。下層の b 層は黄灰色を呈する粘土で、植物遺存体を含む。本調査では、当初、２時期の水田跡を想定して調査を行ったが、a 層のみが耕作土であり、b 層は自然堆積層の可能性が高いと判断した。

４層：第１次調査の７層に対応する自然堆積層で、にぶい黄色を呈するシルト質粘土および粘土である。地点により土色・土質に相違が認められ、細別できる可能性がある。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で発見した遺構には水田跡２面がある。ただし、２層上面検出の水田痕跡は不明確であり、確証はない。遺物は３層水田跡より弥生土器が少量出土した。

（１）２層上面検出水田跡

ⅰ．検出・遺存状況

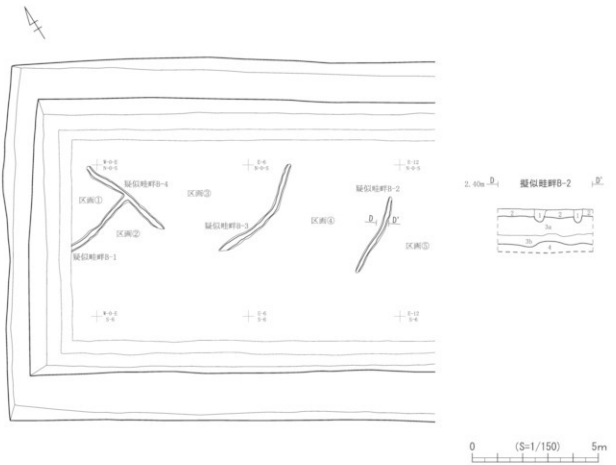
津波堆積物である基本層２層上面で畦畔の痕跡である擬似畦畔Ｂを検出した。

ⅱ．耕作土

耕作土は不明である。基本層１層で細別したいずれかの層が耕作土である可能性があるが、今回の調査では明らかにすることはできなかった。

ⅲ．畦畔

畦畔を確認することはできなかったが、調査区西部で擬似畦畔Ｂを東西方向１条（擬似畦畔Ｂ１）、南北３条（擬似畦畔Ｂ２～４）検出した。擬似畦畔Ｂはごく緩やかな弧状を呈し、検出長約 3.3 ～ 4.5 ｍである。いずれも検出幅約 20 ～ 30cm ほどで、津波堆積物を数cm幅の植物遺存体主体層が挟むように延びている。その規模から小畦畔と推定される。配置をみると、調査区西部で検出した擬似畦畔Ｂ-１と４は直交して「Ｔ」字状に接続している。



第４図 第３次調査２層上面検出水田跡 平面図・断面図

また、擬似畦畔Ｂ２～４は概ね平行し、その心々距離は約 4.0 ～ 5.4 ｍである。

ⅳ．水田区画

擬似畦畔Ｂで画された水田区画①・②・③・④・⑤を確認した。検出した規模から、いずれも小区画とみられる。部分的な検出であることから、区画の規模は不明である。また、水田面の標高は、耕作土が失われていることから明らかにすることはできない。

（２）３層水田跡

ⅰ．検出・遺存状況

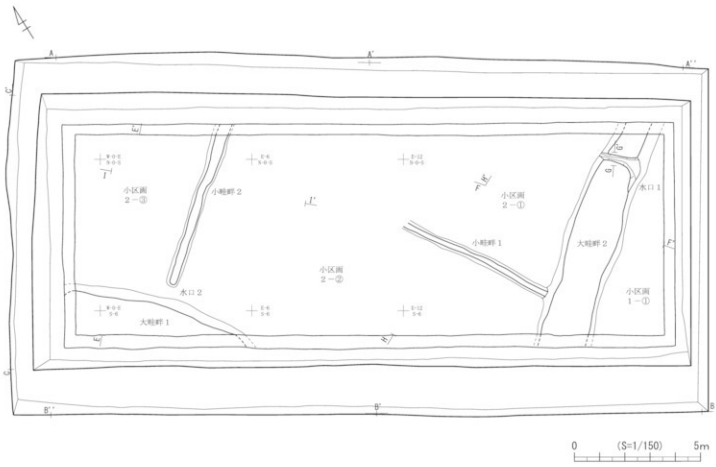
未分解の植物遺存体を主体とする基本層１層と津波堆積物である同２層中で大畦畔２条、小畦畔２条を確認した。

ⅱ．耕作土

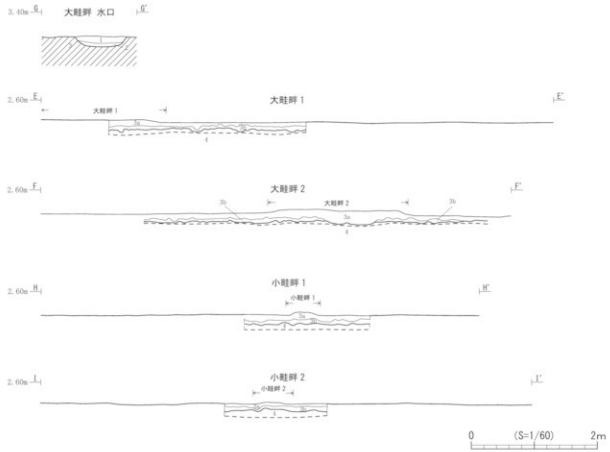
耕作土は基本層 3a 層である。層下面に起伏があり、基本層 3b 層を斑状に含む。地点により植物遺存体を含む。

ⅲ．畦畔

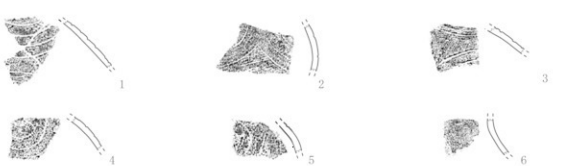
大畦畔２条、小畦畔２条を検出した。いずれも耕作土である 3a 層を盛り上げて造られている。大畦畔には東西方向のもの（大畦畔１）と南北方向のもの（大畦畔２）がある。大畦畦畔１は調査区西部で確認した東西方向の大畦畔である。検出長は約 7.00m で、さらに調査区外西・南へ延びる。部分的な検出ではあるが、規模は上端幅 1.80 ｍ以上、下端幅 2.00 ｍ以上である。耕作土上面との比高差は最大で約 10㎝である。大畦畦畔２は調査区東部で確認した南北方向の大畦畔である。検出長約 4.60m で、さらに調査区外南北へ延びる。規模は上端幅約 1.40 ～ 1.80 ｍ、



第 5 図 第 3 次調査 3 層水田跡平面図



第６図 第３次調査　３層水田跡断面図



掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量 (cm)			調整・文様		備考
								器高	口径	底径	外面	内面	
1	4-1	B-1	大畦畔２上面	3a 層上面	弥生土器	壺	体部片	(3.9)	—	—	沈文（磨消）植物茎回転文	マメツ	
2	4-2	B-2	大畦畔２上面	3a 層上面	弥生土器	壺	体部片	(3.7)	—	—	沈文（磨消）擦痕文		
3	4-3	B-3	大畦畔２上面	3a 層上面	弥生土器	壺	体部片	(2.2)	—	—	外面	マメツ 剥落	
4	4-4	B-4	大畦畔２上面	3a 層上面	弥生土器	壺	体部片	(2.7)	—	—	沈文（磨消）マメツ	マメツ	
5	4-5	B-5	大畦畔２上面	3a 層上面	弥生土器	壺	体部片	(2.5)	—	—	沈文（磨消）植物茎回転文	マメツ	
6	4-6	B-6	大畦畔２上面	3a 層上面	弥生土器	壺	頸部片	(2.8)	—	—	無文（ミガキ）		

第７図 第３次調査出土遺物

下端幅約 2.00 ～ 2.40 mである。耕作土上面との比高差は最大で約 8cmである。

小畦畔は東西方向（小畦畔 1）と南北方向（小畦畔 2）のものがある。小畦畔 1 は調査区東部に位置し、大畦畔 2 に直交して接続する。検出長は約 4.4 mで、規模は上端幅約 10 ～ 20cm、下端幅約 30 ～ 40cm である。水田面と

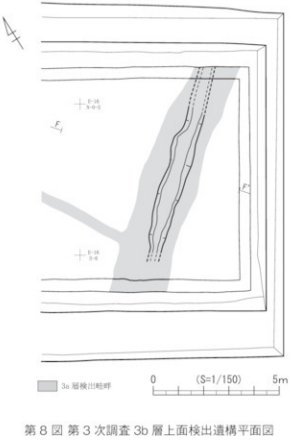
の比高差は最大で約 3cm である。小畦畔２は調査区西部に位置し、大畦畔１に直交し、水口１を挟んで接続する。検出長は 5.6 m 以上で、さらに調査区外北へ延びる。規模は上端幅約 30 ～ 40cm、下端幅約 40 ～ 65cm で、水田面との比高差は最大で約 2cm である。

iv．水田区画

大畦畔に区画された大区画２区画（1、2）と小畦畔によって区画された小区画４区画（1-①、2-①～③）を検出した。畦畔が途切れることや部分的な検出であることから、区画の規模は不明である。水田面の標高は、北西から南東に向かってごく緩やかに傾斜している。また、大畦畔２を挟んで東西に位置する大区画１と小区画 2-②との標高差は約 5cm で、明確な比高差が認められる。

ｖ．水口

大畦畔２で１箇所（水口１）、小畦畔２で１箇所（水口２）の計２箇所を確認した。水田面の比高差から、用水は水田区画 2-③から 2-②へ、水田区画 2-①から 1-①へ供給されていたものと考えられる。



第８図 第３次調査 3b 層上面検出遺構平面図

vi．大畦畔下溝状遺構

大畦畔２下の基本層 3b 層上面で大畦畔と重複し、方向を同じくする溝状の落ち込みを検出した。検出長は約 4.6 mで、さらに調査区外北へ延びる。規模は上端幅約 40 ～ 70cm、下端幅約 10 ～ 50cm で、深さは約 10cm である。断面形は皿状を呈し、底面に凹凸が認められる。堆積土は基本層 3a 層で、基本層 3b 層及び４層を斑状に含む。

vii．出土遺物

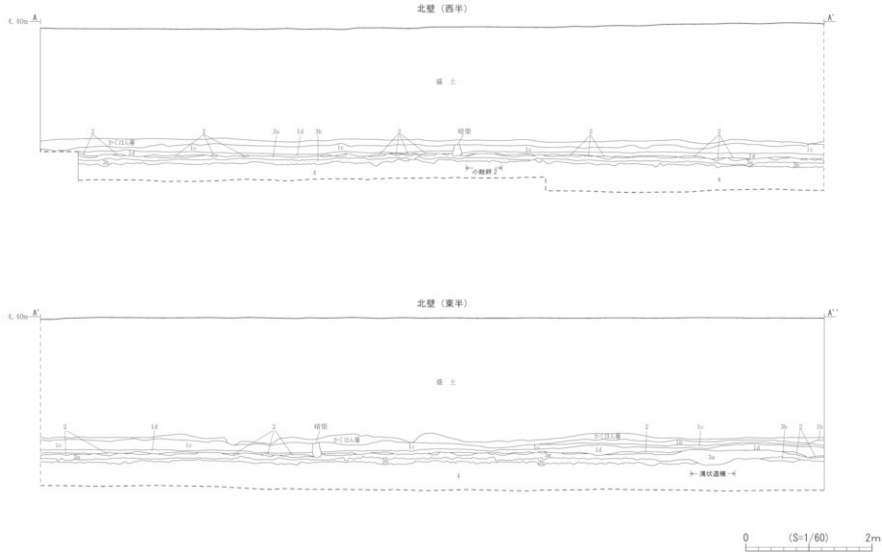
大畦畔２上面で弥生土器が一定の範囲から数点出土した。このうち、６点を図示した（第７図１～６）。壺の頸部または体部の破片資料であるが、全体の器形を把握できるものはない。文様などの特徴から弥生時代中期の桝形囲式に比定される。

5．まとめ

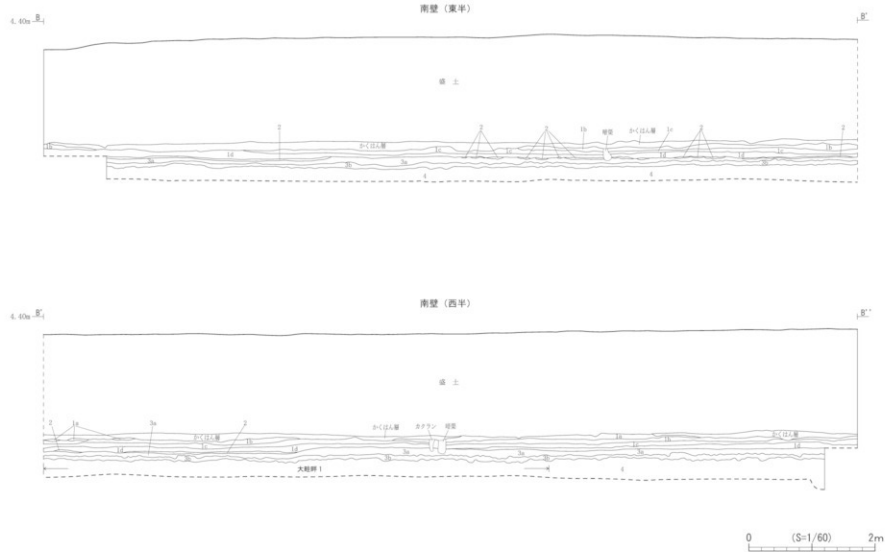
今回の調査で検出した遺構には、約 2,000 年前の津波堆積物に覆われた水田跡が１面あり、それ以降に堆積した植物遺存体主体層を母材とする水田跡が１面存在する可能性がある。

津波堆積物より新しい水田跡の痕跡である可能性があるものには、基本層２層上面で検出した擬似畦畔Ｂがある。擬似畦畔は津波堆積物を数cm幅の植物遺存体層が挟むように延び、４条を検出した。今回の調査では、区画の規模や耕作土を明らかにすることはできなかったが、津波堆積物上面に堆積した植物遺存体層を耕作土の母材とした水田跡が存在する可能性がある。しかし、出土遺物がなく本遺跡における過去の調査では津波により水田が放棄された後、再度、耕作地として利用された痕跡は認められていないことから、時期を推測することはできない。

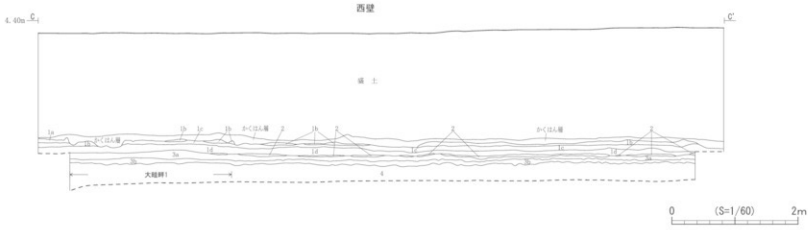
３層水田跡は津波堆積物とみられる砂層に覆われており、これまでの本遺跡や沓形遺跡の調査成果と同様に約 2,000 年前の津波により廃絶したと考えられる。今回の調査では大畦畔２条と小畦畔２条で区画された水田跡が検



第９図　第３次調査断面図（1）



第 10 図　第 3 次調査断面図（2）



基本土層

層位	色調	土質	備考
1a	7.5YR3/4 暗褐色	泥炭質粘土	植物遺体を多量、鉄鉄を含む
1b	10YR2/2 黒褐色	泥炭質粘土	植物遺体を多量含む
1c	2.5Y3/2 黒褐色	泥炭質粘土	植物遺体を互層状に含む
1d	10YR2/2 黒褐色	泥炭質粘土	植物遺体を多量含む
2	10YR6/6 明黄褐色	砂	一部3a層を斑状に含む
3a	10Y3/1 黒褐色	粘土	植物遺体を微量含む
3b	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	植物遺体を少量含む
4	2.5Y6/4 にぶい黄色	シルト質粘土	植物遺体を少量含む　地点により土色・土質に差異あり

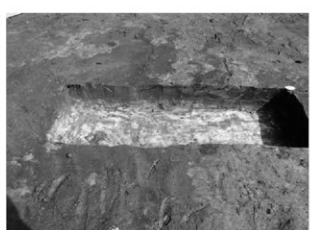
第11図　第3次調査断面図（3）

出された。水田跡は大畦畔１・２によって大区画２区画に区画されている。さらに大区画２は大畦畔に直交する小畦畔１・２によって区画され、今回の調査区内では小区画４区画を検出した。水田区画は方形を基調とするものと考えられるが、部分的な検出であることから区画の規模を明らかにすることはできなかった。今回の調査では、水口２箇所を検出した。水口は水田面の標高から、北西から南東へ向かって用水を供給したものと推定される。

また、大畦畔２直下の基本層 3b 層上面では畦畔と方向を同じくする溝状に延びる遺構を検出した。この溝状の窪みには水田耕作土である基本層 3a 層が堆積し、底面には起伏が認められた。第１次調査５区でも類似した遺構が検出され、大畦畔に生育していた植物の影響の可能性が指摘されている。しかし、今回の調査では、これを裏付ける調査成果は得られなかった。

遺物は、３層水田跡大畦畔２上面で弥生土器の小破片が一定の範囲から数点出土している。器種はいずれも壺である。その特徴から弥生時代中期の桝形囲式と考えられる。これまでの本遺跡第１～２次調査及び香形第１～６次調査で確認されている津波堆積物とそれに覆われる水田跡の年代観と矛盾しない。したがって、３層水田跡は、層位的関係や出土遺物から弥生時代中期の水田跡と判断される。

１．２層上面検出（西から）

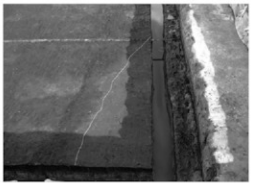


２．２層上面擬似畦畔２断面（南から）

３．３層水田跡検出全景（西から）

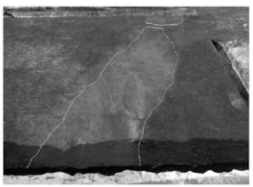
４．３層水田跡検出東部（南から）

写真図版１　第３次調査（1）



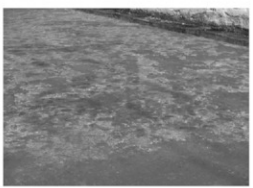
１．３層水田跡大畦畔１確認（西から）

２．３層水田跡大畦畔１断面（東から）



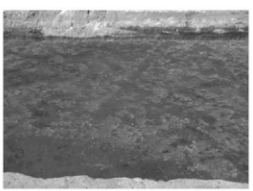
３．３層水田跡大畦畔２確認（南から）

４．３層水田跡大畦畔２断面（南から）



５．３層水田跡小畦畔１確認（南東から）

６．３層水田跡小畦畔１断面（南東から）



７．３層水田跡小畦畔２確認（南から）

８．３層水田跡小畦畔２断面（南から）

写真図版２　第３次調査（２）

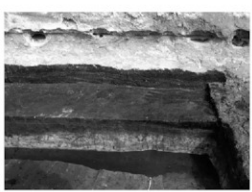
１．３層水田跡水口１検出（東から）

２．３層水田跡水口１完掘（東から）

３．大畦畔２下 溝状遺構検出（南から）

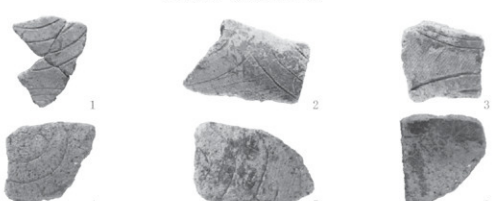
４．大畦畔２下 溝状遺構完掘（南から）

５．調査区西壁断面（北東から）



６．調査区北壁東側断面（南から）

写真図版３　第３次調査（3）



写真図版４　第３次調査出土遺物

第２章 今泉遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

今泉遺跡は、JR 仙台駅の南東約 6.5km、仙台南部道路今泉インターの北西約 500m に位置する。標高２～３m の自然堤防に立地している。この遺跡は、文献などにより須田玄蕃（すだげんば）が居住した中世の城館として古くから知られていた（『仙台領古城書立之覚』）が、仙台市教育委員会による昭和 54 年 (1979)、56 年 (1981)、平成５年 (1993)、６年 (1994) の調査で、縄文時代後期から近世にかけての時代幅をもつことが明らかにされている。

遺跡の主体は、中世の城館である今泉城跡に関わる遺構群である。城館の構造は不明確であるが、南辺の外堀の一部が発見されている。その内部には、掘立柱建物や井戸、溝などの遺構が数多く見つかっており、12 世紀代に屋敷が成立し、南北朝時代に城館として改変・整備され、17 世紀前半頃まで使われていたと推定されている。12～17 世紀の出土遺物は多彩であり、常滑産や瀬戸産の陶器、中国産の青磁や白磁、漆器、木簡、箸、曲物容器、下駄、大足、草履、茶臼、砥石、銅鏡、中国銭、鎌、鉄鏃などがあり、ここに居住した武士の生活の様子を読み取ることができる。他の時代では、昭和 56 年 (1981) の調査で縄文時代後期の土器が出土し、今泉遺跡のような海岸線に近い低地においてもこの時期の遺構が存在する可能性を示した点で注目される。弥生時代では、中期に墓域が形成されており、土器棺墓５基が発見されている。調査区内からは、弥生土器とともに、石庖丁や太型蛤刃石斧などの弥生時代を特徴づける石器も出土しており、周囲に居住域、生産域の存在が推定される。また、古墳時代前期と中期の土坑、平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝、近世の溝などの遺構も見つかっている。

第２節　第 12 次調査

1. 調査要項

遺　跡　名	今泉遺跡 （宮城県遺跡登録番号 01235）
調 査 地 点	仙台市若林区今泉２丁目 35-2、37-1
調 査 期 間	平成 27 年９月 14 日（月）
調査対象面積	346.41㎡
調 査 面 積	28.8㎡
調 査 原 因	宅地造成工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	主査　平間　亮輔

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成 27 年８月４日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成 27 年８月 13 日付 H27 教生文第 103 － 80 号で通知）に基づき、平成 27 年９月 14 日 (月) に実施した。

調査区は、道路建設予定地のうち埋設管の敷設深度が深くなる南端部に３×８ｍで設定した。重機（0.25 バックホー）により基本層Ⅰ・Ⅱ層を除去し、基本層Ⅲ層上面で精査を行った。調査区南部では基本層Ⅲ層が確認できたが、中央から北側にかけては灰黄褐色の粘土層が分布していた。灰黄褐色粘土のブランの北端は不明瞭であったが、南端は直線的であったので東西方向の規模の大きな溝跡であると予想し、重機で掘り下げた。掘り下げる途中で溝の北側上端が調査区外となることが予想されたため、調査区を北に２ｍ拡張して北端を確認している。

番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	今泉遺跡	集落跡・城館跡・包含地	自然堤防	縄文～近世
2	河原橋遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
3	上屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
4	日辺遺跡	散布地	河川敷	古墳
5	日辺館跡	城館跡	自然堤防	中世
6	高田A遺跡	散布地	自然堤防	古代
7	高田B遺跡	集落跡・建物跡・水田跡・河川跡	自然堤防・後背湿地	縄文～近世
8	築道遺跡	散布地	自然堤防	古代
9	下飯田遺跡	集落跡・屋敷跡	浜堤	古墳～中世
10	藤田新田遺跡	集落跡・方形周溝墓・水田跡	浜堤	弥生～古墳・平安
11	屋敷東遺跡	円墳・集落跡	浜堤	古墳～古代
12	下飯田東遺跡	集落跡	浜堤	古墳～古代
13	下飯田東御堂古墳	円墳	浜堤	古墳

第 12 図 今泉遺跡の位置と周辺の遺跡

なお、溝跡の掘り下げに際しては、安全を考慮して調査区の東西壁面から 0.7 mの段を設けた。

Ⅲ層上面では、この溝跡 1 条とピット 3 基を精査し、平面図を 1/40、調査区東壁の断面図を 1/20 で作製し、写真はデジタルカメラで撮影した。精査は当日午後に終了し、その後埋戻しを行った。

3. 基本層序

盛土等の厚さは約 0.6m で、その下に基本層を大別 4 層、細別 6 層確認した。今回の調査における遺構検出面である基本層Ⅲ層上面までの深度は約 0.5m である。各層の特徴は以下のとおりである。

Ⅰ層：オリーブ褐色シルト（2.5Y 4 /3）。層厚約 0.3 m　宅地化以前の耕作土。

Ⅰａ層：10YR4/3　にぶい黄褐色シルト。層厚約 15 ～ 25cm。現在の畑の耕作土。

Ⅰｂ層：10YR4/4　褐色シルト。層厚約 10cm。現在の畑の耕作土。

Ⅱａ層：10YR3/2　黒褐色粘土質シルト。層厚約 15 ～ 30cm。旧耕作土と推定される。

Ⅱｂ層：10YR3/3　暗褐色粘土質シルト。層厚約 10 ～ 20cmで溝跡上から南側にかけて分布する。旧耕作土と推定される。

Ⅲ層：10YR5/3　にぶい黄褐色粘土。酸化鉄を斑文状に多量に含む。層厚約 90cm。今回の遺構確認面。

Ⅳ層：10YR5/4　にぶい黄褐色細砂。

第 13 図 既調査区の位置と今回の調査区

4. 発見遺構と出土遺物

基本層Ⅲ層上面で、溝跡１条とピット３基を確認した。

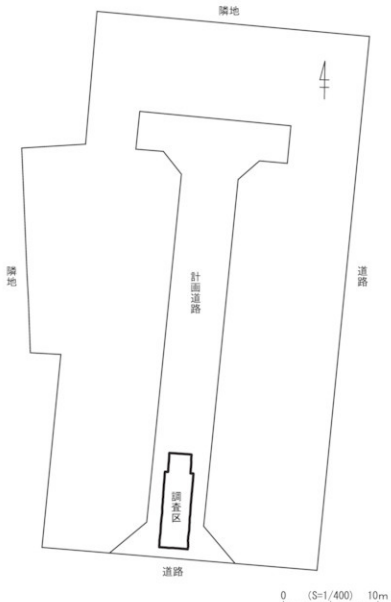
（1）溝跡

ＳＤ１溝跡

調査区を横断する東西方向の溝跡である。部分的な検出にとどまっているため全体の状況は明らかではないが、上端幅 5.8 ～ 6.0 m、下端幅 2.5 m、深さ 1.5 mで、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がるが、北壁の方がより傾斜が緩やかである。堆積土は灰黄褐色～黒褐色粘土で８層に分層できた。堆積状況から自然堆積層と推定される。遺物は出土しなかった。

（2）ピット

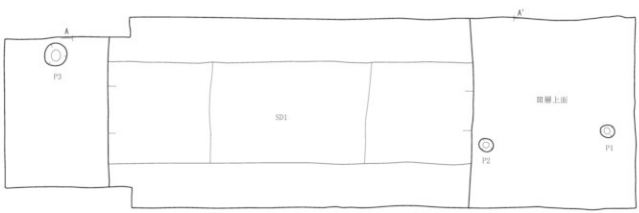
SD1 の北側で１基（P1）、南側で２基（P2・3）確認した。大きさは P1 が直径約 35cm、深さ 30cm、P2・3 が直径約 20cm、深さ 15cm で、柱痕跡は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

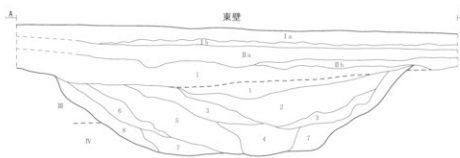


第 14 図 第 12 次調査区設定図

5. まとめ

今回確認された SD1 溝跡は、年代は不明であるものの規模からすると堀跡である可能性がある。調査区の南側には今泉城の中心となる曲輪が位置しているが、SD1 溝跡はその外堀のさらに外側に位置することとなる。なお、今回の調査区から北東に約 70 m離れた平成 20 年の確認調査（H20 - 44）でも南北方向の規模の大きな SD2 溝跡（深さ 1.5 m）が確認されており、このことからも、中心となる曲輪の北側に別の区画が存在した可能性があり、今回の SD1 溝跡はその区画を形成する堀跡である可能性が考えられる。





	層位	色調	土質	備考
基本土層	Ⅰa	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	現耕作土
	Ⅰb	10YR4/4 褐色	シルト	現耕作土
	Ⅱa	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	旧耕作土？
	Ⅱb	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	旧耕作土？
	Ⅲ	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	鉄分を多量含む
	Ⅳ	10YR5/4 にぶい黄褐色	細砂	
SD1	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色・黒褐色粘土ブロックを少量含む
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色・黒褐色粘土ブロックを多量含む
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土ブロックを多量含む
	4	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	灰色粘土ブロックを少量含む
	5	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	灰色粘土ブロックを少量含む
	6	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黒褐色・にぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む
	7	5Y3/2 オリーブ黒色	粘土質シルト	
	8	2.5Y3/1 黒褐色	粘土質シルト	黒色粘土ブロック・灰色細砂ブロックを少量含む

第 15 図 第 12 次調査区平面図・断面図

1．SD1 溝跡全景（南から）

2．SD1 溝跡全景（南西から）

写真図版 5 第 12 次調査（1）

1．SD1 溝跡検出（北から）

2．SD1 溝跡検出（南から）

3．SD1 溝跡断面（西から）

写真図版 6 第 12 次調査（2）

第３章　郡山遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

郡山遺跡は、仙台市太白区郡山二～六丁目に所在する。北を広瀬川、南を名取川に挟まれ、その両河川の合流点から北西約２km に位置する。遺跡の範囲は、東西約 800 m、南北 900 mで面積は約 60ha に及んでいる。その一部は、平成 18 年に「仙台郡山官衙遺跡群　郡山遺跡　郡山廃寺跡」として国史跡に指定されている。

郡山遺跡は、昭和 54 年（1979）に初めて発掘調査が行われ、昭和 55 年（1980）から継続的な調査が行われてきた。官衙は「Ⅰ期官衙」と「Ⅱ期官衙」の２つの時期がある。Ⅰ期官衙は７世紀中頃から後半にかけて機能し、陸奥国の拠点となる柵跡と考えられる。そのⅠ期官衙を取り壊し、建物や塀などの施設の基準を真北方向に変えて設けられたのがⅡ期官衙である。Ⅱ期官衙は７世紀末から８世紀初頭にかけて機能し、多賀城建設までの陸奥国府跡と考えられる。

郡山遺跡の周辺には、西側に長町駅東遺跡と西台畑遺跡が位置しており６世紀末葉～８世紀初頭の竪穴住居跡が 600 軒以上発見されている。また、南西約 1.5km には大型掘立柱建物跡が方形区画の溝とその内部に規則性をもって配置されていることが確認された大野田官衙遺跡があり、建物の規模や出土遺物などから、郡山Ⅱ期官衙との関係性が考えられている。

第２節　第 258 次調査

１．調査要項

道　跡　名	郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号 01003）
調 査 地 点	仙台市太白区郡山２丁目 116 番２
調 査 期 間	平成 27 年８月 24 日～９月 16 日
調査対象面積	36.0㎡
調 査 面 積	36.0㎡
調 査 原 因	基礎掘削を伴うコンクリートブロックよう壁・メッシュフェンスの設置および道路延長工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課整備活用係
担 当 職 員	主事　及川謙作　　文化財教諭　高橋和也

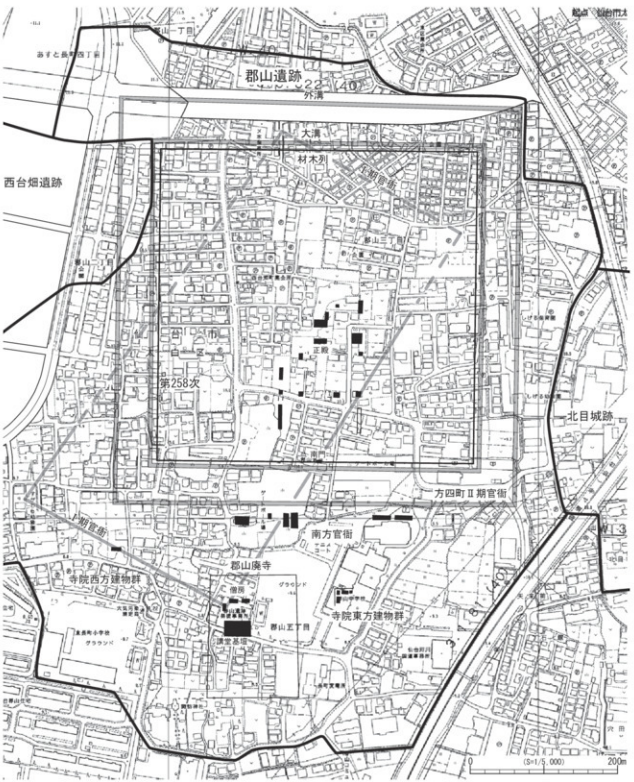
第16図　郡山遺跡と周辺の遺跡（S=1/25,000）

No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
2	西台畑遺跡	集落跡、墨痕墓	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
3	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
4	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世
5	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代

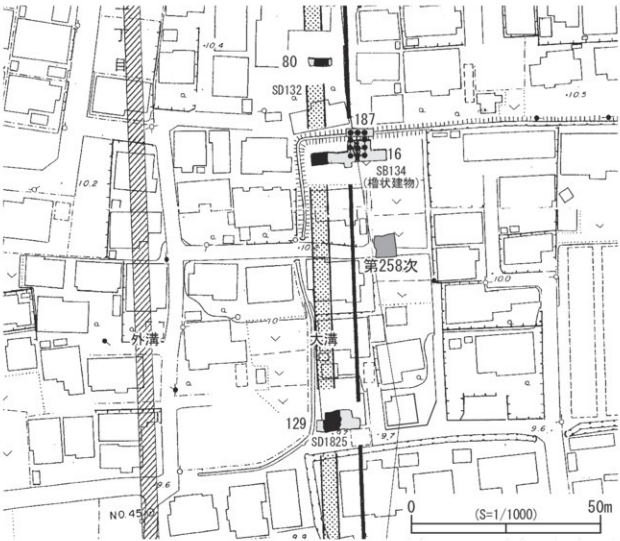
２．調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は申請者より平成 27 年７月 21 日付で提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（平成 27 年７月 24 日付 H27 教生文第 103-72 号で回答）に基づき実施した。対象地は郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の西辺付近にあたり、昭和 56 年度に調査が行われた第 16 次調査区と平成 19 年度に調査が行われた第 187 次調査区の南側に、平成 11 年度に調査が行われた第 129 次調査区の北側に、平成３年度に調査が行われた第 91 次調査区の北西側にあたる。第 16 次と第 187 次調査区からはⅡ期官衙西辺の材木列跡と櫓状建物跡が検出されている。本調査は平成 27 年８月 24 日に着手し、郡山遺跡の座標（№ 45）から、トランシットを用いて基準点の移設を行った。調査区は東西 6.0 m、南北 6.0 mを設定し、重機により耕作土である Ⅰ層（a ～ d 層に細分）と Ⅱ層（a・b 層に細分）を掘り下げ、Ⅲ層上面で遺構検出作業を行った。また調査と並行して対象地の北側と北西側のよう壁設置工事の立会いを行った。

遺構の記録は、調査区配置図（S = 1/100）、遺構平面図（S = 1/20）と調査区断面図（S = 1/20）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。9月16日に調査を完了した。



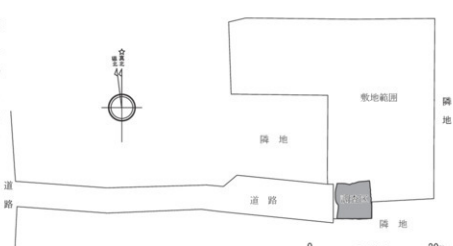
第17図　郡山遺跡調査地点位置図



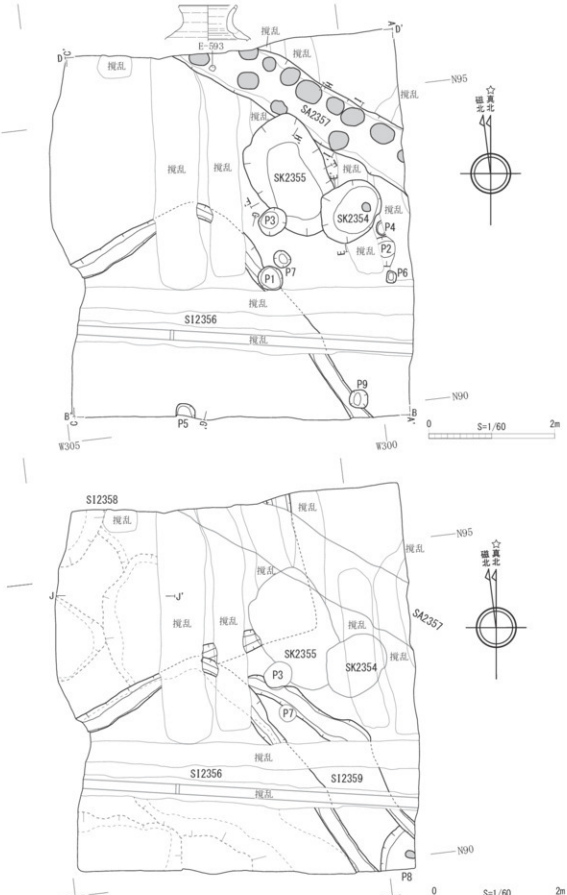
第 18 図　郡山遺跡第 258 次調査区位置図

３．基本層序

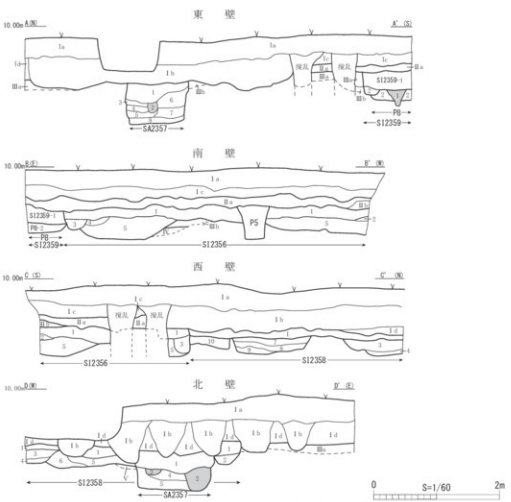
古代の遺構はⅢ層上面で検出した。検出面であるⅢ層上面までの深度は GL-0.55 ～ 0.8 mである。またⅢ層は２層に細分される。またその下層からもⅣ層とⅤ層が確認されている。



第 19 図　郡山遺跡第 258 次調査区配置図



第 20 図　郡山遺跡第 258 次調査区遺構配置図



基本層

層位	色調	土質	備考・混入物
Ⅰa	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	砂粒少量混入、　耕作土
Ⅰb	10YR3/2暗褐色	粘土質シルト	天地返し層
Ⅰc	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	ほぼ均質、耕作土
Ⅰd	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	炭化物少量含む、　耕作土
Ⅱa	10YR4/4褐色	シルト	ほぼ均質
Ⅱb	10YR3/4暗褐色	シルト	炭化粒やや多量に含む
Ⅲa	10YR3/2暗褐色	粘土質シルト	炭化粒少量含む 遺構検出面
Ⅲb	10YR4/6褐色	粘土質シルト	ほぼ均質
Ⅳ	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒斑状に含む
Ⅴ	10YR3/3暗褐色	粘土	にぶい黄橙色粘土ブロック、　酸化鉄粒斑状に含む

SI2356（調査区東・南壁）

層位	色調	土質		備考・混入物
1	10YR3/3暗褐色	シルト	住居内堆積土	焼土粒少量含む
2	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト		炭化粒やや多量に含む
3	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	周溝	Ⅲ層ブロック斑状に含む
4	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	掘方埋土	Ⅲ層ブロック、炭化物少量含む
5	10YR2/3黒褐	粘土質シルト		Ⅴ層ブロック少量含む

SA2357（調査区東壁）

層位	色調	土質		備考・混入物
1	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	抜取り	Ⅲ・Ⅳ層ブロック斑状に多量に含む
2	10YR2/1黒色	粘土	柱痕跡	酸化鉄粒少量含む
3	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土	掘方埋土	Ⅲ層ブロック主体、酸化鉄ブロック斑状に含む
4	10YR3/3暗褐色	粘土		ほぼ均質
5	10YR4/4褐色	粘土質シルト		Ⅲ・Ⅳ層ブロック斑状に含む
6	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト		Ⅲ・Ⅳ層ブロック斑状に多量に含む、酸化鉄粒斑状に含む、黒褐色粘土ブロック少量含む
7	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト		Ⅳ・Ⅴ層ブロック斑状に含む
8	10YR3/1黒褐色	粘土		Ⅴ層地山ブロック斑状に含む

SA2357（調査区北壁）

層位	色調	土質		備考・混入物
1	10YR2/2黒褐色	粘土質シルト	抜取り	Ⅲ層ブロック、酸化鉄粒少量含む
2	10YR2/1黒色	粘土	柱痕跡	酸化鉄粒少量含む
3	10YR2/2黒色	粘土	柱痕跡	酸化鉄粒少量含む
4	10YR2/3黒褐色	粘土質シルト	掘方埋土	第Ⅴ層ブロック主体
5	10YR2/3黒褐色	粘土		Ⅴ層ブロック斑状に含む

SI2358（調査区西・北壁）

層位	色調	土質		備考・混入物
1	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	堆積土	炭化粒少量含む
2	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	周溝	Ⅲ層ブロック、酸化鉄粒少量含む
3	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	掘方埋土	Ⅲ層ブロック少量、酸化鉄粒斑状に含む
4	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト		Ⅲ層ブロック斑状に含む
5	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト		Ⅳ・Ⅴ層ブロック斑状に含む
6	10YR2/1黒色	粘土		Ⅴ層ブロック主体
7	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト		Ⅲ層ブロック斑状に、炭火粒少量含む
8	10YR2/3黒褐色	粘土		ほぼ均質
9	10YR2/3黒褐色	シルト質粘土		Ⅲ層ブロック斑状に含む
10	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト		酸化鉄粒少量含む

SI2359（調査区東・南壁）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR2/3黒褐色	粘土	堆積土　炭化粒、焼土粒少量含む
2	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	周溝　Ⅲ層ブロック、炭化粒少量含む

P5（調査区南壁）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック、炭化粒少量含む

P8（調査区東・南壁）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR2/3黒褐色	粘土	柱痕跡　ほぼ均質
2	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	掘方埋土　Ⅲ層ブロック少量含む

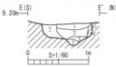
第 21 図　調査区東・南・西・北壁断面図

４．発見遺構と出土遺物

竪穴住居跡３軒、材木列１条、土坑２基、ピット９基が検出された。また各遺構及び基本層中と、遺構検出面、堆積土を中心に土師器や須恵器、石製品や瓦などの遺物が出土している。

【SK2354 土坑】

調査区の東側で検出された。SK2355 土坑より新しい。平面形は楕円形を呈し規模は長径約 1.1 m、短径は約 0.9 mで、深さは約 35cm である。断面形状は箱型を呈し、壁は上面に近い部分がほぼ垂直に立ち上がる。底面やや東寄りの位置に直径約 15cm の柱痕跡が確認されたことから、掘立柱建物の柱穴の可能性がある。堆積土層は７層に細分され、１～４層は掘り直された層と考えられる。堆積土中から土師器の小片が出土している。



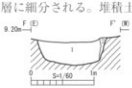
層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック、炭化粒少量含む
2	10YR3/2 黒褐色	粘土	Ⅲ層ブロック中量、炭化粒少量含む
3	10YR3/4 暗褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロック少量含む
4	10YR3/2 黒褐色	粘土	Ⅴ層ブロック主体
5	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	Ⅴ層ブロック主体、炭化粒少量含む
6	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒少量含む
7	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック斑状に、炭化粒少量含む

第 22 図　SK2354 土坑土層断面図

第 23 図　SK2354・2355 配置図

【SK2355 土坑】

調査区の中央やや東側寄りで検出された。SA2357 材木列より古く、P3 と SK2354 土坑より新しい。平面形は楕円形を呈し規模は長径約 1.95 m、短径は約 1.2 mで、深さは約 45cm である。断面形状は逆台形を呈している。堆積土層は２層に細分される。堆積土中から土師器と須恵器の小片が出土している。



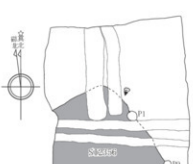
層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック多量に含む、にぶい黄褐色粘土ブロック斑状に含む
2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック Ⅲ層主体、炭化粒少量含む

第 24 図　SK2355 土坑土層断面図

【SI2356 竪穴住居跡】

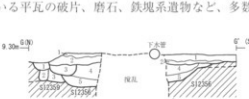
調査区の南側で検出された。P1、P5、P9 より古く、SI2358 竪穴住居跡と SI2359 竪穴住居跡より新しい。住居跡の北東辺と北西辺にかけて確認したが、南東辺と南西辺が調査区外となっている。規模は北西 - 南東方向が 4.4 m以上、北東－南西方向が 2.3 m以上である。遺構検出面から床面までの深さは 10～25cm である。床面は掘り込んだ面をそのまま利用している箇所もあるが、大部分は掘方を約 20～35cm 埋め戻して床面としている。

床面の施設としては、北東壁と北西壁際に周溝を確認した。周溝は幅約 25～35cm、深さは約 20cm である。カマドは確認できなかった。



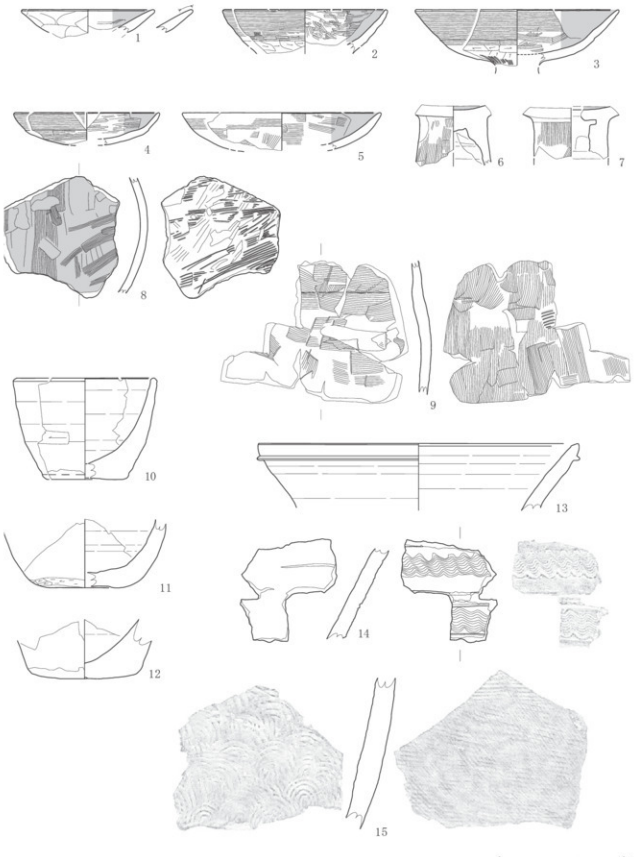
第 25 図　SI2356 配置図

検出面から堆積土を中心に、土師器の坏、高坏、壺、甕、須恵器の鉢、壺、甕、丸瓦や一部が砥石に転用されている平瓦の破片、磨石、鉄塊系遺物など、多数の遺物が出土している。（第 27・28 図）

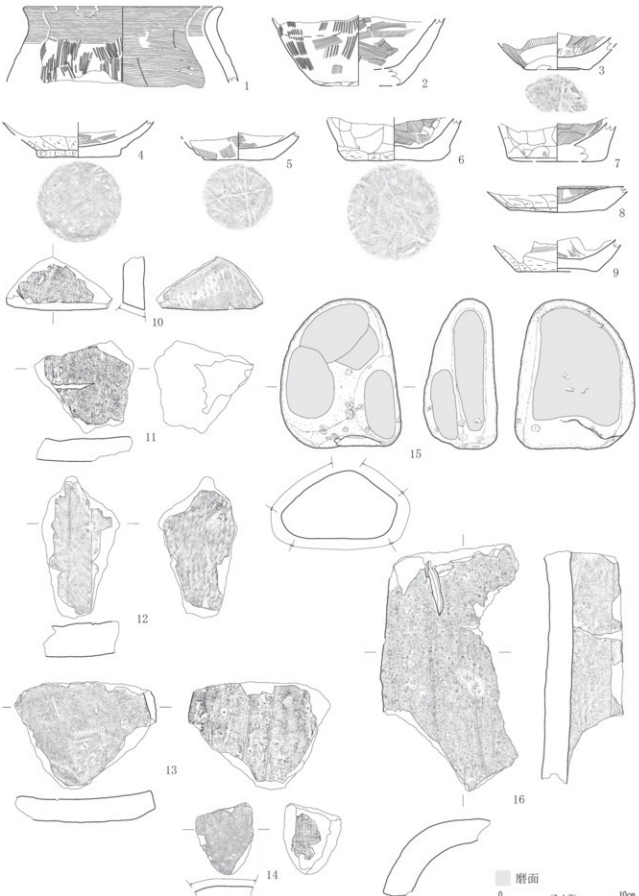


遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SI 2356	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	住居内堆積土 焼土粒少量含む
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒やや多量に含む
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	周溝 Ⅲ層ブロック斑状に含む
	4	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	掘方埋土 Ⅲ層ブロック少量含む
	5	10YR2/3 黒褐	粘土質シルト	Ⅴ層ブロック少量含む
SI 2359	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	周溝 炭化粒少量含む
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	周溝？ 炭化粒やや多量に含む
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	掘方埋土 Ⅴ層ブロック斑状に、酸化鉄粒少量含む

第 26 図　SI2356 竪穴住居跡土層断面図



第 27 図　SI2356 竪穴住居跡出土遺物（1）



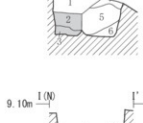
第 28 図　SI2356 竪穴住居跡出土遺物（2）

図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点・層位	法量（cm）	外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	写真図版
27-1	C-1177	土師器	高坏?	SI2356	堆積土	口径：(10.5)　底径：-　器高：-	ナデ	ミガキ（摩滅）口縁部・裾台として二次利用	9-2
27-2	C-1176	土師器	坏	SI2356	堆積土	口径：(12.8)　底径：-　器高：-	ヘラケズリ→ヨコナデ	ヘラミガキ　黒色処理	
27-3	C-1183	土師器	高坏	SI2356	堆積土	口径：(16.1)　底径：-　器高：-	口縁部：ヨコナデ　ヘラナデ→ヘラケズリ→ハケメ	ヘラミガキ→ヘラナデ　黒色処理	
27-4	C-1182	土師器	坏	SI2356	堆積土	口径：(11.5)　底径：-　器高：2.6	ヨコナデ　ヘラナデ	ヘラミガキ　黒色処理	9-1
27-5	C-1184	土師器	高坏?	SI2356	堆積土	口径：(15.7)　底径：-　器高：-	ヨコナデ　ヘラナデ　（摩滅）	ヘラミガキ→ヘラナデ　黒色処理	
27-6	C-1179	土師器	高坏	SI2356	掘方	器高：(4.9)　脚部幅：(5.5)	ヘラナデ　（摩滅）	ヘラナデ　指オデ	
27-7	C-1180	土師器	高坏	SI2356	掘方	器高：(4.1)　脚部幅：(5.8)	ヘラナデ→指オデ　（摩滅）	ヘラナデ　指オデ	
27-8	C-1170	土師器	鉢?	SI2356	周溝	口径：-　底径：-　器高：-	ハケメ　ミガキ　一部ヘラナデ?	ヘラナデ　黒色処理	9-5
27-9	C-1178	土師器	甕	SI2356	堆積土	口径：-　底径：-　器高：-	ヘラナデ　一部ハケメあり	ヘラナデ　ナデ	9-3
27-10	E-588	須恵器	鉢?	SI2356	堆積土	口径：(11.0)　底径：8.1　器高：6.0	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	9-9
27-11	E-586	須恵器	壺	SI2356	堆積土	口径：-　底径：(7.0)　器高：-	ロクロ　ヘラケズリ　底部：ヘラケズリ　指オサエ	ロクロ	
27-12	E-587	須恵器	捏鉢	SI2356	堆積土	口径：-　底径：(8.4)　器高：-	ロクロ→ヘラケズリ?底部：ヘラケズリ	ロクロ　（摩滅著しい）	9-8
27-13	E-589	須恵器	甕	SI2356	掘方	口径：(25.4)　底径：-　器高：-	ロクロナデ	ロクロナデ	9-10
27-14	E-590	須恵器	甕	SI2356	堆積土	口径：-　底径：-　器高：-	波状綿　沈線	ロクロナデ	9-14
27-15	E-595	須恵器	甕	SI2356	堆積土	口径：-　底径：-　器高：-	平行叩き	同心円叩き	9-15
28-1	C-1181	土師器	甕	SI2356	堆積土	口径：(14.4)　底径：-　器高：-	ヨコナデ　ハケメ	ヨコナデ　ヘラナデ	9-6
28-2	C-1185	土師器	甕	SI2356	堆積土	口径：-　底径：6.4　器高：-	ハケメ　ヘラナデ　輪積痕（一部摩滅）	ヘラナデ	
28-3	C-1172	土師器	甕?	SI2356	堆積土	口径：-　底径：(5.1)　器高：-	ヘラナデ　ナデ	ヘラナデ　ミガキ	
28-4	C-1173	土師器	壺	SI2356	堆積土	口径：-　底径：6.5　器高：-	ヘラケズリ（摩滅）　底部：ヘラケズリ	ヘラナデ	9-4
28-5	C-1175	土師器	甕	SI2356	堆積土	口径：-　底径：5.3　器高：-	ヘラナデ　底部：木葉痕	ヘラナデ	
28-6	C-1171	土師器	甕	SI2356	堆積土	口径：-　底径：7.6　器高：-	ナデ?　胴部～底部における ヘラケズリ　底部：木葉痕	ヘラナデ	
28-7	C-1169	土師器	甕	SI2356	堆積土	口径：-　底径：(7.8)　器高：-	ヘラナデ→指オサエ	ヘラナデ	
28-8	C-1174	土師器	壺	SI2356	堆積土	口径：-　底径：7.9　器高：-	ヘラケズリ	ヘラナデ	9-7
28-9	C-1167	土師器	甕	SI2356	堆積土	口径：-　底径：(6.4)　器高：-	ヘラナデ　ヘラケズリ　底部：木葉痕	ヘラナデ	
28-10	G-158	瓦	平瓦	SI2356	堆積土	最大長：4.3　最大幅：8.4	凹面：布目痕　ヘラ痕　凸面：短縄叩き　側面：凱石として使用		9-13
28-11	G-156	瓦	平瓦	SI2356	掘方	最大長：6.6　最大幅：7.7	凹面：布目痕　横骨痕　　凸面：ナデ		
28-12	G-155	瓦	平瓦	SI2356	堆積土	最大長：11.2　最大幅：6.2	凹面：布目痕　横骨痕　凸面：縄目痕　短縄叩き?		
28-13	G-154	瓦	平瓦	SI2356	堆積土	最大長：8.5　最大幅：11.1	凹面：布目痕→磨り消し　凸面：ナデ　側面：ヘラケズリ		9-12
28-14	G-157	瓦	平瓦	SI2356	堆積土	最大長：7.7　最大幅：4.5	凹面：布目痕　　凸面：ナデ　凱石として使用		
28-15	K-355	礫器	磨石	SI2356	堆積土	最大長：11.9　最大幅：9.2　厚さ：5.4	敲打痕		9-16
28-16	F-114	瓦	丸瓦	SI2356	堆積土	最大長：19.2　最大幅：10.0	凹面：布目痕→すり消し（ナデ?）　凸面：ヘラケズリ→ナデ　側面：ヘラケズリ		9-11

【SA2357 材木列】

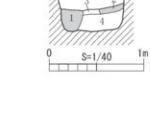
調査区の北東側で検出された。SI2358 竪穴住居跡より古く、SK2355 土坑より新しい。方位は W-31° -N の北西－南東方向で、検出長は約 4.45 m で、調査区外にさらに延びる。上端幅は約 80cm で下端幅は約 55 ～ 70cm、掘方の深さは約 55 ～ 65cm である。断面形状は箱型を呈し、壁は垂直に立ち上がる。柱痕跡が掘方の北壁際に 7 基がほぼ隣接しあって検出され、掘方の南壁際から中央部にかけて 5 基が検出された。柱痕跡の直径は約 20 ～ 40cm で、円形を呈するものとやや楕円形を呈するものがある。抜取りからの深さは約 15 ～ 35cm

第 29 図　SA2357 配置図



H-H'

層位	色調	土質		備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	抜取り	Ⅱ・Ⅳ層ブロック斑状に多量に含む
2	10YR2/1 黒色	粘土	柱痕跡	酸化鉄粒少量含む
3	10YR7/2 にぶい黄橙色	粘土	柱痕跡？	酸化鉄粒少量含む
4	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	掘方埋土	Ⅱ・Ⅳ層地山ブロック斑状に多量に含む
5	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト		Ⅱ・Ⅳ層ブロック斑状に多量に、酸化鉄粒斑状に、黒褐色粘土ブロック少量含む
6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト		Ⅳ・Ⅴ層ブロック斑状に多量に含む



I-I'

層位	色調	土質		備考・混入物
1	10YR2/1 黒色	粘土	柱痕跡	ほぼ均質
2	10YR2/2 黒褐色	粘土	柱痕跡	にぶい黄橙色粘土ブロック、酸化鉄粒少量含む
3	10YR7/2 にぶい黄色	粘土質シルト	掘方埋土	Ⅱ・Ⅳ層ブロック斑状に、酸化鉄粒少量含む
4	10YR4/4 褐色	粘土質シルト		Ⅱ・Ⅳ層ブロック斑状に多量に含む

第 30 図　SA2357 材木列土層断面図

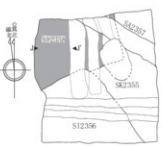
で、北壁際の柱痕跡は比較的大型で深く、掘方底面にまで至るが、南壁際の柱痕跡は小型で浅く、掘方埋土内に収まる。掘方中央から南壁際の柱痕跡の間隔は 0.65 ～ 1.05 mである。最上層は柱の抜取り層で、その底面から柱痕跡が確認された。抜取り層からは須恵器の短頸壺の頸部から口縁部の破片（E-591・第 31 図 1）が、またそれ以外にも須恵器と土師器の小片が出土している。

図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点	法量（cm）	外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	写真図版
1	E-591	須恵器	短頸壺	SA2357	抜取り	口径：(9.2) 底径：- 器高：-	ロクロナデ	ロクロナデ　輪積痕	9-17

第 31 図　SA2357 材木列出土遺物

【SI2358 竪穴住居跡】

調査区の北西側で検出された。SI2356 竪穴住居跡と SA2357 材木列より古い。住居跡の東辺と南辺にかけて確認したが、西辺と北辺が調査区外となっている。また天地返しと他の遺構との重複により、遺構東側の大部分が削平を受けており、平面形状は不明瞭である。規模は南北方向が約 3.1 m以上、東西方向は 4.1 m以上である。遺構検出面から床面までの深さは 10 ～ 20cm である。床面は掘り込んだ面をそのまま利用している箇所もあるが、掘方を約 10 ～ 30cm 埋め戻して床面としている箇所もある。



第 32 図　SI2358 配置図

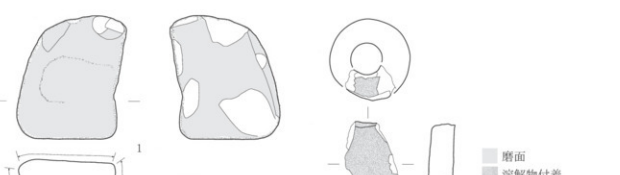
床面の施設としては、東壁と南壁際に周溝を確認した。周溝は幅約 30 ～ 40cm、深さは約 20cm である。カマドは確認できなかった。

検出面から堆積土にかけて、漆の付着した土師器の小形甕、須恵器の壺、砥石に転用されている平瓦の破片、磨石、羽口など、多数の遺物が出土している。（第 34・35 図）

層位	色調	土質		備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	堆積土	Ⅲ層ブロック斑状に、炭火粒少量含む
2	10YR2/3 黒褐色	粘土	掘方埋土	ほぼ均質
3	10YR2/3 黒褐色	シルト質粘土		Ⅲ層ブロック少量、酸化鉄粒斑状に含む

第 33 図　SI2358 竪穴住居跡土層断面図

第 34 図　SI2358 竪穴住居跡出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点	法量（cm）		外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	写真図版
34-1	C-1186	土師器	甕	SI2358	堆積土	口径：(6.6)　底径：-　器高：-	ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ　漆付着	10-1
34-2	C-1197	土師器	甕	SI2358	堆積土	口径：(7.0)　底径：-　器高：-	口縁部：ヨコナデ（摩滅） ヘラナデ（摩滅）	口縁部：ヨコナデ　ヘラナデ 漆付着	10-3
34-3	C-1187	土師器	甕	SI2358	堆積土	口径：-　底径：-　器高：-	ハケメ	ナデ　輪積痕	10-2
34-4	E-592	須恵器	壺	SI2358	堆積土	口径：-　底径：(5.6)　器高：-	ヘラケズリ　沈線	ロクロナデ	10-4
34-5	G-160	瓦	平瓦	SI2358	堆積土	最大長：(5.5)　最大幅：(3.7)	凹面：布目痕　ケズリ　横骨痕　凸面：砥石として利用 側面：砥石として利用		
34-6	G-159	瓦	平瓦	SI2358	堆積土	最大長：(4.7)　最大幅：(8.1)	凹面：布目痕　一部砥石として利用　凸面：砥石として利用		10-6
34-7	G-162	瓦	平瓦	SI2358	堆積土	最大長：(5.6)　最大幅：(8.0)	凹面：布目痕　横骨痕　凸面：（摩滅著しい）		
35-1	K-356	礫器	磨石	SI2358	堆積土	最大長：9.7　最大幅：7.9 厚さ：1.7 ～ 1.9　重量：260	磨面４面		10-7
35-2	P-70	土製品	羽口	SI2358	堆積土	残存長：(4.7)　残存幅：(3.9)　孔径：(2.5)	不明　被熱　ガラス質溶解物付着		10-5

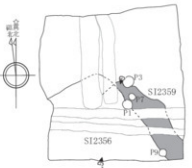
第 35 図　SI2358 竪穴住居跡出土遺物（2）

【SI2359 竪穴住居跡】

調査区の南側で検出された。P1、P3、P7、P9 と SI2356 竪穴住居跡より古く、P8 より新しい。住居跡の北東辺を確認したが、南東辺と南西辺が調査区外となっており、北西辺は SI2356 竪穴住居跡と重複しており残存していない。規模は北西 - 南東方向が約 4.4 m以上、北東 - 南西方向が 2.3 m以上である。遺構検出面から床面までの深さは 25 ～ 30cm である。床面は掘り込んだ面をそのまま利用している。

床面の施設としては、北東壁際に周溝を確認した。周溝は幅約 25 ～ 35cm、深さは約 20cm である。カマドは確認できなかった。

堆積土中から土師器の小片と丸瓦（F-115・第 37 図 1）が出土している。



第 36 図　SI2359 配置図

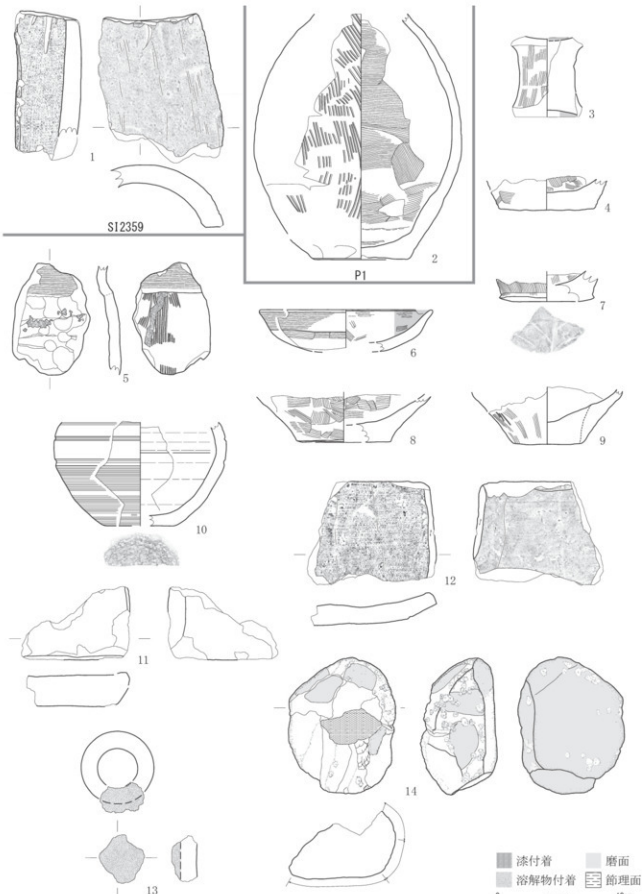
【ピット】

今回の調査区からは 9 基のピットが検出された。平面形状は円形を呈する。大部分の直径は約 15 ～ 45cm、遺構検出面からの深さは約 10 ～ 26cm を測る。柱痕跡が検出された P8 は、東側と南側が調査区外になるため全体像は不明だが、直径は約 70cm で、掘り方底面までの深さは約 25cm、柱痕跡の直径は 15 ～ 20cm である。

P1 からは土師器の甕（C-1188・第 37 図 2）が、また P5 ～ P7、P8 の掘方埋土からも土師器の小片が出土しており、そのうち P5 から出土したものには漆が付着している。

【その他の出土遺物】

今回の調査区からは遺構検出面である Ⅲ 層上面および上層の Ⅰ・Ⅱ 層内を中心に、数多くの遺物が出土している。これは Ⅰ b 層に伴う天地返しの際、下層の遺構から巻き上げられたためと考えられる。出土した遺物は土師器、



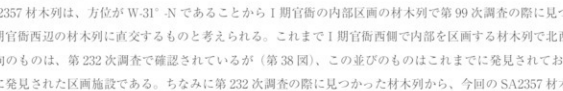
第 37 図　SI2359 竪穴住居跡・P1・遺構外出土遺物

図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点		法量（cm）	外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	写真図版
37-1	F-115	瓦	丸瓦	SI2359	1 層	最大長：11.5　最大幅：9.0	凹面：粘土紐痕　布目痕　凸面：縄叩き→ナデ（縦方向） 側面・狭端面：ヘラケズリ		10-8
37-2	C-1188	土師器	甕	P1	1 層	口径：-　底径：7.3　器高：-	体部：ハケメ　指ナデ 底部：木葉痕	ヘラナデ　輪積痕	10-9
37-3	C-1191	土師器	高坏	調査区	Ⅱ層上面	器高：-　脚部幅：4.4 ～ 5.5	ヘラナデ	ヘラミガキ　ヘラナデ　黒色処理	
37-4	C-1193	土師器	甕	調査区	Ⅱ層上面	口径：-　底径：（7.6）　器高：-	ヘラナデ（摩滅） 底部：ヘラナデ（摩滅）	ヘラナデ	
37-5	C-1190	土師器	壺	調査区	Ⅱ層上面	口径：-　底径：-　器高：-	体部：ハケメ 頸部：ヨコナデ　漆付着	輪積→指オサエ 頸部：ヨコナデ　漆付着	10-13
37-6	C-1192	土師器	甕or鉢	調査区	Ⅱ層上面	口径：（12.6）　底径：-　器高：-	口縁部：ヨコナデ（摩滅） ヘラナデ（摩滅）	ヘラミガキ→ヘラナデ（摩滅） 黒色処理	10-10
37-7	C-1195	土師器	甕	調査区		口径：-　底径：（7.5）　器高：-	ヘラナデ　底面：木葉痕	ヘラナデ	
37-8	C-1196	土師器	甕	北側掘壁		口径：-　底径：（7.5）　器高：-	ヘラナデ	ナデ	10-12
37-9	C-1194	土師器	甕	調査区		口径：-　底径：5.6　器高：-	ハケメ→ヘラナデ（摩滅著しい） 底部：ヘラナデ	ヘラナデ（摩滅著しい）	10-11
37-10	E-593	須恵器	壺	調査区	Ⅱ層上面	口径：-　底径：（5.6）　器高：-	ロクロナデ→カキメ→沈線	ロクロナデ	10-14
37-11	G-161	瓦	平瓦	調査区	Ⅱ層上面	最大長：（5.6）　最大幅：（8.4）	凹面：布目痕（摩滅）　凸面：摩滅著しい　側面：ヘラケズリ		
37-12	G-163	瓦	平瓦	調査区		最大長：（8.0）　最大幅：（10.0）	凹面：布目痕　ヘラケズリ　模骨痕 凸面：寸デ→端部ヘラケズリ　布目痕　側面：ヘラケズリ		10-15
37-13	P-71	土製品	羽口	調査区		残存長：3.8　残存幅：3.5　孔径：（3.2）	被熱　溶解物付着		
37-14	K-357	礫器	磨石	調査区		最大長：11.0　最大幅：8.5　厚さ：5.4	3 面磨　敲打痕		

須恵器、瓦、羽口などである。また北側の擁壁工事立会いの際にも土師器の甕が出土している。今回はこの内土師器の坏、高坏、甕などを７点、須恵器の壺１点、平瓦２点、羽口１点、磨石１点を図示する。

５．まとめ

今回の調査区からは２基の土坑と１条の材木列、３軒の竪穴住居跡が検出された。各遺構の重複関係や時期差については以下の通りである。ただし、並列して表記した遺構は、必ずしも同時期を示すものではない。



(1) SA2357 材木列について

SA2357 材木列は、方位が W-31° -N であることから I 期官衙の内郭区画の材木列で第 99 次調査の際に見つかった I 期官衙西辺の材木列に直交するものと考えられる。これまで I 期官衙西側で内部を区画する材木列で北西－南東方向のものは、第 232 次調査で確認されているが（第 38 図）、この並びのものはこれまでに発見されておらず、新たに発見された区画施設である。ちなみに第 232 次調査の際に見つかった材木列から、今回の SA2357 材木列の距離は直線で約 102 m を測る。また SA2357 材木列の最上層は抜取り層であり、時期は不明であるが最終的には柱を切り取られ全面的に改変を受けたものと考えられる。

(2) 竪穴住居跡について

第 258 次調査で見つかった竪穴住居跡からは、比較的多くの遺物が出土したが、大部分が床面よりも上層の堆積土中からの出土である。しかし SI2358 竪穴住居跡が SA2357 材木列より古い、また最も新しい SI2356 竪穴住居跡の出土遺物の様相から、いずれも I 期官衙の時期であると考えられる。

(3) 出土遺物について

今回出土した遺物の中で特徴的なことは、住居跡から坏などの饗膳具が少なく、壺・甕類などが比較的数多く出土したことや、瓦も一定数出土したことである。土師器の甕に関しては SI2358 竪穴住居跡と調査区検出面から、体部にハケを残し、漆が内外面に付着した小型の壺が合計で３点（C-1186・第 34 図 1、C-1197・第 34 図 2、C-1190・第 37 図 5）出土している。また砥石として再利用された坏（C-1177・第 27 図 1）も SI2356 竪穴住居跡から出土している。

須恵器も坏類が少なく、壺や、甕、鉢などが出土している。その中で SI2356 竪穴住居跡の堆積土中から出土した鉢（E-588・第 27 図 10）は小型で、コップ形を呈している。SI2356 竪穴住居跡からは捏鉢（E-587・第 27 図 12）

第 38 図　郡山遺跡第 258 次調査区周辺の遺構

の底部も出土している。Ⅲ層上面から出土した壺（E-593・第 37 図 10）は、焼成はやや酸化炎色を呈するが胎土が精良で、体部のほぼ全面に細かなカキ目が施された後に沈線が２条施されている。全体の器形は不明だが、金属器を模倣したものである可能性がある。調整はやや異なるが、同じく沈線を施し器形と胎土が類似するものは、SI2358 竪穴住居跡からも出土している。（E59・第 34 図 4）

瓦は３軒の竪穴住居跡のいずれからも出土している。平瓦は大部分は細片であったが、凸面、側面、凹面の一部を砥石として二次利用した痕跡が見られる資料が４点（G-154・第 28 図 13、G-15・第 28 図 14、G-160・第 34 図 5、G-159・第 34 図 6）出土している。これ以外にも、調査区内からは輪の羽口や磨石が、SI2356、2358 竪穴住居跡などから出土している。

このように今回の調査区からは竪穴住居跡を中心に数多くの遺物が出土したが、一般的な住居跡とはやや様相が異なる遺物群が出土しているように窺える。しかし今回の調査は遺構の部分的な調査であることから、詳細については、今後さらに検討を重ねていきたい。

引用・参考文献

仙台市教育委員会　1994　『郡山遺跡Ⅹ Ⅳ』　仙台市文化財調査報告書第 178 集
仙台市教育委員会　1995　『郡山遺跡Ⅹ Ⅴ』　仙台市文化財調査報告書第 194 集
仙台市教育委員会　2005　『郡山遺跡発掘調査報告書　総括編（1）』　仙台市文化財調査報告書第 283 集
辻秀人他　2007　「古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究」平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
仙台市教育委員会　2011　『郡山遺跡　第 190 次調査』　仙台市文化財調査報告書第 389 集
仙台市教育委員会　2012　『郡山遺跡　他』　仙台市文化財調査報告書第 405 集
仙台市教育委員会　2013　『仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』仙台市文化財調査報告第 416 集
仙台市教育委員会　2013　『郡山遺跡 33』　仙台市文化財調査報告書第 417 集

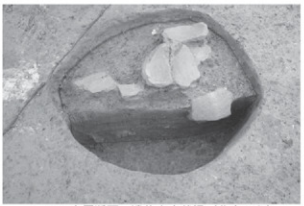
1．調査区全景遺構検出状況出土状況（東から）

2．SA2357 柱痕跡検出状況（北西から）

3．SA2357 土層断面（H-H'・北西から）

4．SA2357 土層断面（I-I'・北西から）

写真図版７　第 258 次調査区（1）


1. P1 土層断面・遺物出土状況（北東から）

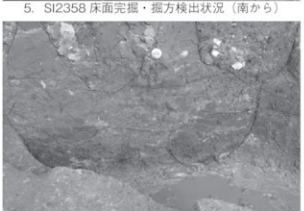
2. SK2354 土層断面・底面柱痕跡検出状況（東から）

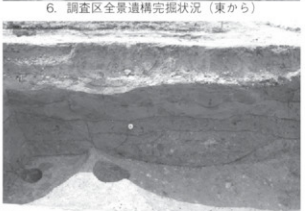
3. SI2356・2359 土層断面（西から）

4. SI2356 床面完掘状況（北東から）

5. SI2358 床面完掘・掘方検出状況（南から）

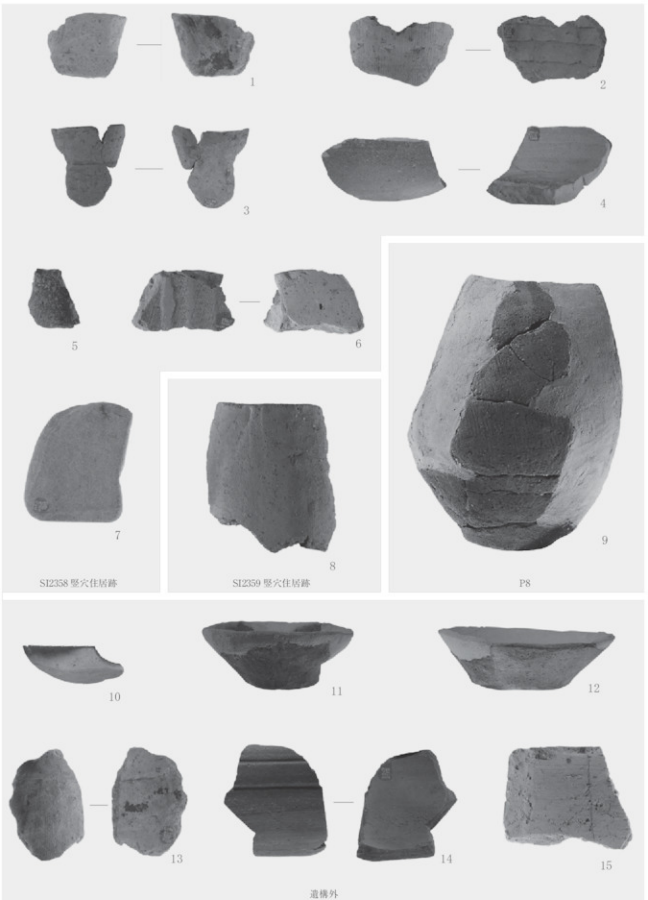
6. 調査区全景遺構完掘状況（東から）


7. 調査区北壁・SA2357 土層断面（南から）


8. 調査区南壁・P8・SI2356 土層断面（北から）

写真図版 8　第 258 次調査区（2）

写真図版９　第 258 次調査出土遺物（1）



写真図版 10　第 258 次調査区出土遺物（2）

第４章　総括

Ⅰ．荒井南遺跡第３次調査

約 2,000 年前の津波堆積物に覆われた水田跡１面を検出した。また、それ以降に堆積した植物遺存体主体層を母材とする水田跡１面が存在する可能性がある。

津波堆積物より新しい水田跡の痕跡である可能性があるものには、基本層２層上面で検出した擬似畦畔Ｂがある。擬似畦畔は津波堆積物を数cm幅の植物遺存体層が挟むように延び、４条を検出した。今回の調査では、区画の規模や耕作土を明らかにすることはできなかった。出土遺物もなく、その時期は不明である。

３層水田跡は津波堆積物とみられる砂層に覆われており、過去の本遺跡や沓形遺跡の調査成果と同様に約 2,000 年前の津波により廃絶したと考えられる。今回の調査では大畦畔２条と小畦畔２条で区画された水田跡が検出された。

また、大畦畔２直下の基本層 3b 層上面では畦畔と方向を同じくする溝状に延びる遺構を検出した。この溝状の窪みには水田耕作土である基本層 3a 層が堆積し、底面には起伏が認められた。第１次調査５区でも類似した遺構が検出され、大畦畔に生育していた植物の影響の可能性が指摘されている。

遺物は、３層水田跡大畦畔２上面で弥生土器の小破片が一定の範囲から数点出土した。器種はいずれも壺である。その特徴から弥生時代中期の桝形囲式と考えられる。したがって、３層水田跡は、層位的関係や出土遺物から弥生時代中期の水田跡と判断される。

Ⅱ．今泉遺跡第 12 次調査

今回確認された SD1 溝跡は、年代は不明であるものの規模からすると堀跡である可能性がある。調査区の南側には今泉城の中心となる曲輪が位置しているが、SD1 溝跡はその外堀のさらに外側に位置することとなる。なお、今回の調査区から北東に約 70 m離れた平成 20 年の確認調査（H20-44）でも南北方向の規模の大きな SD2 溝跡（深さ 1.5 m）が確認されており、このことからも、中心となる曲輪の北側に別の区画が存在した可能性があり、今回の SD1 溝跡はその区画を形成する堀跡である可能性が考えられる。

Ⅲ．郡山遺跡第 258 次調査

竪穴住居跡３軒と材木列１条、土坑２基、ピット９基が調査された。材木列は方位が W-31° -N の北西－南東方向であることから Ⅰ 期官衙に伴うものであり、これまでに知られていない並びの内部区画施設が存在することが今回新たに判明した。

竪穴住居跡からは土師器を中心に比較的多くの遺物が出土したが、瓦も一定量出土した。瓦の一部は砥石として転用されており、また竪穴住居跡からは鉄滓や羽口なども出土したことから、近隣に鍛冶に伴う遺構が存在していた可能性がある。竪穴住居跡は切り合い関係や出土遺物から、いずれも Ⅰ 期官衙の時期のものであると考えられる。また竪穴住居跡と調査区一括出土資料の中に、体部に沈線とカキ目を施した、金属器の壺を模倣したと見られる須恵器の破片が２点出土した。

報告書抄録

ふりがな	あらいみなみいせきほか
書名	荒井南遺跡ほか
副書名	発掘調査報告書
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第446集
編著者名	鈴木隆　佐藤洋　小泉博明　及川謙作　小林航
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-0011　仙台市青葉区上杉1丁目5-12　仙台市役所　上杉分庁舎10階　TEL：022-214-8894
発行年月日	平成28年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
荒井南遺跡（3次）	要約							
	仙台市若林区荒井字遠藤西	4100	01571	38° 14′ 19″	140° 56′ 32″	20150216 20150327	286.2㎡	記録保存 （復興公営住宅新築）
	水田跡	弥生		水田跡		弥生土器		
	約2000年前の津波堆積物に覆われた弥生時代中期の水田跡1面、および時期不明の水田跡1面を検出した。							
今泉遺跡（12次）	仙台市若林区今泉二丁目	4100	01235	38° 12′ 41″	140° 55′ 42″	20150914	28.8㎡	記録保存 （宅地造成工事）
	集落跡・城館跡・包含地	縄文～近世		溝跡		遺物なし		
	堀跡想定範囲の北辺外側で溝跡を1条検出した。中心の曲輪とは別区画の堀である可能性がある。							
郡山遺跡（258次）	仙台市太白区郡山二丁目	4100	01003	38° 13′ 21″	140° 53′ 25″	20150824 20150916	36.0㎡	記録保存 （擁壁設置・道路延長）
	官衙跡・寺院跡・包含地	縄文～中世		竪穴住居跡・材木列・土坑		土師器・須恵器・瓦		
	竪穴住居跡3軒・材木列1条・土坑2基・ピット9基を検出した。遺物は土師器・須恵器・瓦・石製品などが出土した。							

仙台市文化財調査報告書第446集

荒井南遺跡他

発掘調査報告書

2016年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉1丁目5－12
仙台市役所上杉分庁舎10階
文化財課　TEL 022（214）8894

印刷　株式会社　仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目1－14
TEL 022（231）2456